

医学用語の造語法についての考察 (2) 語要素の区別

川崎医療短期大学 一般教養* 医療秘書科**

名木田恵理子* 田中 伸代** 太田 英子** 岡田 聚**

(平成 7 年 8 月 21 日受理)

A Review of Word-Building System for Medical Terminology (2) The Distinction between Word Elements

Eriko NAGITA*, Nobuyo TANAKA**, Eiko OTA** and Atsumu OKADA**

**Department of General Education*

***Department of Medical Secretarial Studies*

Kawasaki College of Allied Health Professions

Kurashiki, Okayama 701-01, Japan

(Received on Aug. 21, 1995)

Key words : 造語法, 語要素, 連結形, 接頭辞, 接尾辞

概 要

医学用語の造語法をより深く理解するための試みとして、造語法とそこで定められている語要素がどのように適用されているかを検討してきた。本論文では、医学用語の語要素の中の、特に接頭辞と接尾辞について、4種のテキスト、2種の辞典を対象にして、その記載状況を調べた。その結果、接頭辞と連結形、接尾辞と語または連結形の分別はテキスト間でも、また辞典間でもくいちがっていることが明らかになった。また、辞典の増補改訂の中で追加された語要素についても調査したが、語要素の記載が、今では原理的な基準を離れて、現実の用語使用状況をふまえて行われていることがわかった。

はじめに

膨大な数の医学用語を一つひとつ覚えていくよりも、各語要素 (word element) を覚えることによって医学用語の意味を理解するほうが効率がよく、簡単であることは、欧米の医学用語テキストのほとんどが造語法 (word-building system) による導入を採用していることでもわかる。しかし、この造語法を機械的に適用していくと、ルールでは説明できない語に遭遇することが少なからずある。そこで、われわれはこの造語法に注意を向けて綿密な検討を行うことにしたのである。

造語法については、アメリカのテキストでは

次のように紹介されている。すなわち、「語の要素は、〈語根、接頭辞、接尾辞〉に分けられ、各医学用語は〈接頭辞+1つ以上の語根+接尾辞 (接頭辞、接尾辞はすべての用語につくとは限らない)〉という構成で成り立っている。このとき、語根はそれのみでは発音しにくいので、連結母音をつけた連結形の形で覚えていく。そして、これら語要素をつなぐには、次のような3つの「ルール」がある：

- (1) 連結母音にはふつう *o* が用いられ、語根と語根、あるいは語根と接尾辞の連結部に使われる。
- (2) 語根と接尾辞の連結で、接尾辞が母音で始まるときには連結母音は使われない。

(3) 語根同士の連結の場合には、あとにくる語根が母音で始まっている、連結母音は省略できない。」

このルールは接頭辞、連結形、接尾辞が明確に規定されているという前提の上に成立するものである。前回われわれはまず、医学用語辞典の記載状況を調査し、連結形を中心に音の脱落現象をみた¹⁾。その結果、1. 連結母音は発音のための便宜上のものであり、「連結母音は接尾辞が子音の場合に使われ、母音の場合は脱落する」というルールに例外があること、2. 母音脱落、重音脱落、hの脱落は、無視できない程度に発生していることなどが実証された。この所見から、造語法の基本概念を成す連結形のとらえ方が、実はそれほど強い規定を持つものではないことがわかってきた。そこで今回はさらに、そのルールを構成するほかの語要素（接頭辞と接尾辞）についてもどのように分類・記載されているかを見ていくことにした。

調査対象と方法

今回の調査では、先の研究で調べた資料のうち、語要素の設定がはっきりしているテキスト4冊と、医学用語辞典2冊を使った。書名を挙げると次のとおりである。

・テキスト

1. Medical Terminology (Barbara Cohen 編著)²⁾
2. Medical Terminology (Barbara Gylys & Mary Ellen Wedding 編著)³⁾
3. Exploring Medical Language (Myrna LaFleur & Winifred Starr 編著)⁴⁾
4. Medical Terminology (Jacqueline Birmingham 編著)⁵⁾

(以下テキスト名は、編著者の名前を使って

1. Cohen, 2. Gylys, 3. LaFleur,
4. Birmingham と略す)

・辞典

1. Dorland's Illustrated Medical Dictionary. 28th ed.⁶⁾
2. Stedman's Medical Dictionary. 25th ed.⁷⁾

(以下、それぞれ Dorland, Stedman と表わす。日本語版の場合はカタカナでドーランド、

ステッドマンとする)

調査は次の3点に焦点を置いて行った。

1. 接頭辞の設定は固定されているか。
2. 接尾辞はどのようにとらえられているか。
3. 各語要素の辞典への記載状況はどのように推移しているのか。

方法としては、4種類のテキストから、接頭辞、接尾辞としてあげられているものをすべてとりだし、同時に Dorland, Stedman の2辞典での記載状況も調べて対照した。なお、前回使った『加藤勝治編：医学英和大辞典（南山堂）』を調査対象からはずしたのは、この辞典の語要素が、「接頭語」と「接尾語」という2分類しかない、つまり、ほかの辞典で連結形とされているものがここでは「接頭語」としてあげられていることによる。この分け方は、実は Dorland の初期の版で見られたものである。

また、各語要素の流れ（成立過程）を見るために、日本語版ドーランドが25版⁸⁾から27版⁹⁾に改訂される過程で増やされた16,000語の中の、語要素をとりだして検討した。

本報での語要素の表記は、辞典やテキストの方式にならって、prefix はその後に、suffix はその前にハイフン(-)をつけることにし、combining form は 'word root/o' という形で統一する。また、prefix, suffix, combining form に対応する日本語に統一性がなく、ドーランドでは「接頭語」「接尾語」「造語形」、ステッドマンでは「接頭辞」「接尾辞」「連結形」というように異なっているが、ここでは第1報の表記に従ってステッドマンの訳語に統一した。また、この調査は4つのテキストに掲載されている語要素のみに基づいていることをあらかじめ断っておく。

結果および考察

1. 接頭辞について

(1) 表1にみられるように、4つのテキストで接頭辞として分類されている語要素にはばらつきがある。たとえば、全テキストで延べ180の接頭辞が掲げられているが、Birmingham がそのうち159を接頭辞としているのに対し、LaFleur は34しか載せていない。また Dorland は63、Stedman は74という記載状況である。

表 1 接頭辞

接頭辞	C	G	L	B	D	S	接頭辞	C	G	L	B	D	S	接頭辞	C	G	L	B	D	S
a-, an-	○	○	○	○	○	○	ex-		○	○	○	○	○	paleo-				○	△	△
ab-	○	○			○	○	ex(o)-	○△	○	○			○	pan-	○	○	○	○	○	○
acro-	△	△	△		○	△	extra-	○	○			○	○	para-	○	○	○	○	○	○
ad-	○	○			○	○	fore-					○		path(o)-	△		△	○△	△	△
alb-, alba-		○			○		gen-	△				○		per-	○				○	○
albmino-		○△					glauc(o)-		○△					peri-	○	○	○	○	○	○
allo-					○	△	glyco-, gluco-	△		△	○	△	△	phage(o)-	△	△		○△	△	△
ambi-		○			○	○	gyn-, gynec-	△	△	△	△	△	△	platy-					○	△
ambly-	○	△			○	△	haplo-						○	pleo-					○	△
amphi-		○			○	△	hemi-	○	○	○	○	○	○	plic(o)-					○△	
ana-					○	○	heter(o)-	○	○△	△	○	△	△	plur(i)-					○△	△
andro-	△	△	△		○	△	hidr(o)-	△	○△	△	△	△	△	poikilo-	○	△			○	△
angi(o)-	△	△	△		○△	△	hist(o)-	△	○△	△	△	△	△	polio-		○	△		○	△
aniso-					○	△	holo-					○	△	poly-	○	○	○	○	△	○
ankyl(o)-	○	△	△		○△	△	homeo-	○	△			○	△	post-	○	○	○	○	○	○
ante-	○	○	○		○	○	homo-	○	○△			○	○△	postero-		○△				△
anter(o)-		○△			○	○	hydra-, hydr(o)-	△	○△	△	○	△	△	pre-	○	○	○	○	○	○
anti-	○	○			○	○	hyper-	○	○	○	○	○	○	presby-	○					△
apo-					○	○	hypo-	○△	○	○	○	○	○	prim(i)-	○△	○	△	○		
atel(o)-	○	△	△		○	△	idio-					○	△	pro-	○	○			○	○
auto-	○		△		○	○	in-, im-, ir-	○	○		○	○	○	pro-, proso-					○	△
bacter(o)-					○	△	infra-	○	○		○	○	○	prot(o)-					○△	△
bi-, bin-	○	○	○		○	○	inter-	○	○	○	○	○	○	pseudo-	○	○	△	○	△	○
bi(o)-			△		○△	△	intra-	○	○	○	○	○	○	purpur(o)-		○△				
brachy-					○	△	iso-	○	△			○△	○	quad-		○				
brady-	○	○	○		○	△	juxta-	○				○		quadr(i)-	○△	○	△	○△	○	△
brevi-					○	△	later(o)-		○△			△	△	re-			○	○	○	○
cac(o)-					○△	△	lepto-					○	△	retro-	○	○			○	○
cata-, kata-					○	○	leuc(o)-					○	△	rub(e)-		○△			○	
centi-					○	○	leuk(o)-	○△	○△	△	○	△	△	schisto-					○	△
chlor(o)-			○△		○	△	levo-					○	○△	schizo-					○	△
chromo-	△	△	△		○	△	lute-					○		scler(o)-	△	○△	△	○	△	△
circum-					○	○	macro-	○	○			○	△	semi-	○	○			○	○
cirrh(o)-			○△		○		mal-	○	○			○	△	sinistr(o)-	○△	○			○△	△
clin(o)-					○△	△	medi-					○		staphyl(o)-	○△		△	△	△	△
co-, com-, con-					○	○	mega-	○				○	△	steno-					○	△
contra-	○	○			○	△	megalo-	○				△	△	stereo-					○	△
cry(o)-	△	△	△		○△	△	melan(o)-	○△	○△	△	○	△	△	strept(o)-	○△		△		△	△
crypt(o)-	△	△	△		○△	△	mes(o)-	○△	○△			○	○	sub-	○	○	○	○	○	○
cyan(o)-	○△	○△	△		○	△	meta-					○	○	super-	○	○			○	○
de-	○				○	○	micro-	○	○	○		△	○△	supra-	○	○	○	○	○	○
deca-					○	△	Micro-	○				△		syn-, sym-	○	○	○	○	○	○
deci-					○	△	mid-					○		tachy-	○	○	○	○	△	△
demi-					○	○	milli-					○	○	tele-	○				○	△
dextr(o)-	○△	○△			○	○△	mio-					○	△	tel(e), tel(o)-	○△				○	△
di-	○	○			○	○	mon(o)-	○△	○△	△	○	△	○	terato-	△				○	△
dia-	○	○	○		○	○	multi-	○	○	○	○	△	○	ter(t)-					○	○
diplo-	○	○	△		○	△	neo-	○	△	○	○	△	○	tetra-					○	△
dis-	○				○	○	nigro-					○		therap(o)-					○	
dorsi-					○	△	noct(i), noct(o)-	△	△	△	○△		△	thermo-		△	△	△	○	△
dors(o)-			○△		○		non-					○		tox(o), toxic(o)-			△	△	○	△
dys-	○	○	○		○	△	normo-	○				○	△	trachy-					○	
e-					○		null(i)-	○			○	○△		trans-	○	○	○	○	○	○
ec-			○		○		nyct(o)-	△				○△	△	tri-	○	○			○	○
ecto-	○	○			○	○	ob-					○		ultra-		○			○	○
endo-	○	○	○		○	○	olig(o)-	○△	△	△	○	△	△	un-	○					○
epi-	○	○	○		○	○	opisth(o)-					○	△	uni-	○	○			○	○
erythr(o)-	○△	○△	○		○	△	ortho-	○	△	△	○	△	△	xanth(o)-	○△	○△	△	○	△	△
eso-					○	△	oxy-, ox(o)-	○		△	○	△	△	xero-	○	△	△	○	△	△
eu-	○	○	○		○	△	pachy(o)-	○	△	△	○	△	○	接頭辞の数	90	87	34	159	63	74
eur-					○	△														

C : Cohen
 G : Gyls & Wedding
 L : LaFleur & Starr
 B : Birmingham
 D : Dorland
 S : Stedman

○ : 接頭辞
 ○△ : 接頭辞及び連結形
 △ : 語根・連結形

Birmingham の接頭辞記載が多いのは、ほかのテキストや辞典が連結形としているものを接頭辞としているからで、それには次のようなものがある。

acro-, andro-, angio-, aniso-, bactero-, bio-, brachy-, brevi-, caco-, chromo-, clino-, cryo-, crypto-, dorsi-, eso-, eury-, glyco-, gluco-, gyn-, gynec-, haplo-, holo-, idio-, lepto-, mio-, nocti-, nycto-, opistho-, paleo-, patho-, phageo-, platy-, pleo-, pluri-, proso-, proto-, schisto-, schizo-, steno-, terato-, thermo-, toxico-

この中には、これまでわれわれが連結形と見ていたものが多く含まれている。Birmingham は大きさ、量、数、色などを表わして形容詞としての働きをしているものを接頭辞の中にいれているようである。実際、Birmingham は接頭辞を、1. 時と場所に関するもの、2. ほかの部分との関連を位置付けるもの、3. 種類に関するもの、4. 方向を示すもの、5. 数を表わすもの、6. 大きさ、量に関するもの、7. 色に関するもの、として説明している¹⁰⁾。

さらに、辞典では連結形とされているのにもかかわらず、複数のテキストで接頭辞としてあげられているものに、brady-, cyano-, diplo-, erythro-, hetero-, leuko-, macro-, mal-, melano-, micro-, sinistro-, tachy-, xantho- などがある。これらも、臓器、器官を表わすものではなく、色、大きさ、数量など、形容詞的意味合いをもつものばかりである。このように、Birmingham 以外のテキストでも辞典が連結形としている語要素を接頭辞とする傾向が見られる。また、Gyls のように、連結形としても接頭辞としても記載しているテキストもある。

(2) Dorland, Stedman 両辞典とも共通して接頭辞と認めているものは次の通りである。

a-(an-, ar-), ab-, ad-, ambi-, ana-, ante-, antero-, anti-, auto-, bi-(bin-), centi-, circum-, co-(con-, com-), de-, demi-, dextro-, di-(dis-), dia-, endo-, epi-, ex-, exo-, extra-, hemi-, hyper-, hypo-, in-(im-), infra-, inter-, intra-, iso-, levo-, meso-, meta-, milli-, pan-, para-, per-, peri-, post-, pre-, pro-, re-, retro-, semi-, sub-, super-, supra-, syn-(sym-), trans-, tri-, ultra-, uni-

これらは、ほとんどのテキストで接頭辞として認められていると言ってよい。各テキストに述べられている「独立していない」、「前置詞的役割を持つ」、「語根につけて意味を変える」という接頭辞の定義に合致しているものばかりである。

(3) 2つの辞典で接頭辞か連結形かの見解が別れている語要素には、allo-, amphi-, apo-, cata-(kata-), contra-, deca-, deci-, dys-, ecto-, eu-, mono-, multi-, neo-, pachy-, poly-, pseudo-, quadri-, tetra- がある。この中で Dorland が接頭辞としているのは、amphi-, apo-, cata-, ecto-, quadri- で、接頭辞ではなく連結形としているのは、allo-, contra-, deca-, deci-, dys-, eu-, mono-, multi-, neo-, pachy-, poly-, pseudo-, tetra- である。しかし、このうち contra-, dys-, ecto-, eu-, multi-, neo-, poly-, pseudo- などは一般には接頭辞としての扱いを受けている。

辞典でもテキストでも、接頭辞は「語、語根、接尾辞の前についてその意味を変える」と定義されている。また、どのテキストも接頭辞を「それのみでは語として機能しない付録的なもので語根とはちがうもの」としている。しかし、表1を見るかぎりでは、テキストと辞典のすべてにおいて接頭辞とされているものは一部しかなく、語要素としての分別があいまいなものがたくさん存在している。実際には、接頭辞と連結形の間にはそれほど明確な線引きがなされているわけではないようである。次のような、注目すべき説明がテキストの中で見られた。まず、Birmingham は、“Vowels are also added to prefixes to make them combining forms.”と述べている¹¹⁾。また、Gyls も、接頭辞の説明の最後に “In some words, a prefix can also serve as a combining form.” という一文を付け加え、その例として leuk/o/cyte をあげている。Gyls によれば、leuko は leuk という接頭辞に母音がついて連結形として機能しているという¹²⁾。

2. 接尾辞について

(1) Stedman では接尾辞は “A suffix also can alter the function of the word by changing it from one part of speech to another, as from a noun to an adjective or from a verb to

a noun.”¹³⁾ (下線は筆者)と説明されている。これからいえば、厳密な意味での接尾辞は語根を名詞形に変える -ia, -y, -osis や、形容詞語尾の -ic, -al, -ac などを用いるのであろう。しかし、現実には語根に接尾辞がついた「複合接尾辞 (compound suffix)」が、接尾辞とされている例が多く見られる。たとえば、-pexy は pex/o に接尾辞 -y がついて接尾辞となったものである。また、-algia も、みなが接尾辞と認めている語要素だが、実は「痛み」を表わす alg/o と名詞語尾 -ia に分割できる。そこで、接尾辞は、実際には品詞をかえるという機能面での変化をもたらすだけでなく、新しい意味を語根に付加するものともなっている。

表2にあるように、テキストから集めた接尾辞の多くがこのような「複合接尾辞」であることがわかる。主な例をあげると、-ia (状態を表わす名詞語尾) がついてきた -algia, -emia, -plegia, -y (状態または方法を表わす名詞語尾) がついた -ectomy, -megaly, -pexy, -plasty, -tomy, -trophy, -e (道具を示す名詞語尾) がついた -scope, -tome などである。そして、複合接尾辞が多くなっているということは、接尾辞かどうかの分別基準が辞典あるいはテキストによってくいちがってくるという結果を招いている。表2にもそのばらつきが表われている。表からは、接尾辞と考えられているものが語あるいは連結形とされている場合や、逆に、連結形だが、接尾辞として、あるいは接尾辞の位置で使われるという但し書きがついている場合などがあることがわかる。

(2) テキストによってとらえ方が違うという現象が接尾辞でもみられる。接尾辞としてあげているものの数に、Gyls の129から Cohen の88までの差がある。Gyls と Birmingham に記載数が多い理由は、Gyls は語も接尾辞としてあげていること、Birmingham は反対に基本的接尾辞を多くあげていることからである。また、Cohen は基本的接尾辞のことを word ending とよんで、複合接尾辞と区別している。

(3) テキストでは、接尾辞的に使われている例が多ければ、語も接尾辞としてあげている(特に Gyls は掲載接尾辞129のうち30が語)。次の接尾辞は、辞典では語として掲載されているの

に、テキストで接尾辞とされているものである(括弧内の数字は掲載テキスト数)。これらは、独立した単語としても、また、接尾辞としてほかの語要素につけた形でも使われている。

-centesis, -meter (4)
 -ectasis, -lysis, -malacia, -ptosis, -stasis (3)
 -algnesia, -asthenia, -atresia, -esthesia, -form,
 -genesis, -ostomy, -paresis, -phobia, -phylaxis,
 -physis, -salpinx, -sclerosis, -spasm, -stenosis,
 -thorax (2)
 -apheresis, -blast, -chlorydria, -coccus, -cysis,
 -cyst, -dipsia, -emesis, -globin, -gravida, -ictal,
 -kinesia, -lithiasis, -manometer, -mycosis,
 -para, -phoreisis, -porosis, -prandial,
 -pyorrhea, -sarcoma, -sthenia, -tension,
 -therapy, -toxic, -tropia (1)

(4) 辞典には掲載されていないが、テキストでは載せられている接尾辞がかなりある。それらはおおまかに言って、機能上の変化のみをもたらす基本的な接尾辞と、あまり用語例がない複合接尾辞とである。前者には、

- 単数名詞語尾、複数名詞語尾 (-a, -en, -ex, -is, -ix, -ma, -nx, -on, -um, -us)
- 形容詞語尾 (-ac, -al, -ar, -ary, -ory,)
- 縮小語尾 (-cle, -et, -icle, -ium, -ole, -olum, -olus, -ula, -ule)
- 人を表わす語尾 (-er, -ician, -ist, -or)

がある(ただし、化学物質や(病的)状態を表わす接尾辞は、辞典でも記載がみられる)。これらは、接尾辞本来の「機能を変える」という働きを持っているがゆえに、すでに複合接尾辞に組み込まれている場合が多い。辞典への掲載がないのはそのためと思われる。

後者には、-capnia, -chezia, -lexia, -osmia, -pepsia, -phasia, -phonia, -plakia, -plasm, -ptysis, -schisis, -trophia などがある。なかには、かなりの造語例を持つものもあるが、まだ辞典への掲載にはいたっていない。

(5) Dorland と Stedman とでは、接尾辞のとらえ方が違うようである。表2にも示しているように、Dorland は、基本的な接尾辞を「接尾語 (suffix)」, 複合接尾辞 (語根+接尾辞) を「語尾形 (word termination)」とよんで一応の区別をしているが、Stedman はみな「接尾辞

表2 接尾辞

	C	G	L	B	D	S		C	G	L	B	D	S		C	G	L	B	D	S	
-a	e	o																			
-ac	o	o	o	o																	
-acy																					
-ad						s	s														
-agogue					t	s															
-agra					t	s															
-al	o	o	o	o	s																
-algisia	o	o			△	△															
-algia	o	o	o	o	t	s															
-an																					
-ance																					
-apheresis				o	△	△															
-ar	o	o	o	o																	
-arche		o																			
-ary	o	o	o	o																	
-ase	o				t																
-asthenia		o	o		△																
-ate					t																
-atresia				o	△																
-ax		o																			
-blast		o			△	s															
-capnia	o	o	o																		
-cele	o	o	o	o	t	s															
-centesis	o	o	o	o	t△	△															
-chezia																					
-chlorhydria					△	△															
-chrome		o			t																
-cide					t																
-cis					o																
-clasia	o		o	o																	
-clasis	o	o	o	o																	
-clast		o	o		t																
-cle, cule																					
-cleisis					o	s															
-coccus				o	△	△															
-crine		o																			
-crit			o																		
-culum, -culus					o																
-cuis		o																			
-cysis		o			△	△															
-cyst					△	△															
-cyte	o		o	o	t	s															
-desis	o	o	o	o	t																
-dipsia					△																
-dom					o																
-drome																					
-dynia	o	o	o	o																	
-eal																					
-ectasis	△	o	o	o	△	s															
-ectomy	o	o	o	o	t△	c															
-ema					o																
-emesis		o			△	△															
-emia	o	o	o	o	t	s															
-en	e																				
-ene						s	s														
-er		o																			
-esis					t	s															
-esthesia	o	o			△	△															
-et																					
-ex	e	o																			
-facient					t	s															
-form	o				△	s															
-fugal					t	s															
-ful																					
-gen					t	s															
-genesis	o	o			t△	△															
-genic					t	s															
-geusia	o																				
-globin		o	o		△	△															
-gram	o	o	o	o	t	s															
-graph	o	o	o	o	t	s															
-graphy	o	o	o	o	t	s															
-gravida		o			△	△															
-hemia	o																				
-hood																					
-ia	o	o	o	o	t	s															
-ial																					
-ian'	o																				
-iasis	o	o	o	o	t	s															
-iatrix	o																				
-iatrist	o																				
-iatriy	o				t																
-ic	o	o	o	o	s	s															
-ical	o	o																			
-ician	o	o	o	o																	
-icle		o																			
-ictal					o	△	△														
-id					o	t	s														
-ide					o	s	s														
-ies																					
-ile	o																				
-in, ine						s															
-ion																					
-ious																					
-is	e	o																			
-ism	o	o	o	o	t	s															
-ist	o	o																			
-itis	o	o	o	o	t	s															
-ity																					
-ium																					
-ive																					
-ix	e	o																			
-kinesia					t	△															
-lalia	o																				
-lepsy	o	o																			
-less																					
-lexia	o																				
-lith					t																
-lithiasis		o			△	△															
-logy	o	o			t	s															
-lysis	△	o	o	o	t	△															
-ma																					
-malacia	△	o	o	o	△	△															
-manometer					△	△															
-megaly	o	o	o	o	t	s															
-meter	o	o	o	o	t	△															
-metry	o	o	o	o	t																
-mycosis		o			△	△															
-ness																					
-nx	o																				
-odynia					t																
-oid	o	o	o																		

(suffix)」としている。また、同じ語要素でも両辞典の間で接尾辞ととるか、語ととるか、また連結形とするか解釈がわかれている場合がある。

例えば Dorland は -blast, -ectasis, -form, -ostomy, -ptosis を語とみなし, -kinesia, -lysis, -meter, -phoresis などは接尾辞 (語尾形) としている。Stedman はその反対に, 前者を接尾辞とし, 後者を語としている。

3. 増加する語要素

このように見ていくと語要素の分別は, 一貫していないでやや客観性を欠くもののように見えるが, そこには学習効果と実用を第一に考えたテキスト編集者の方針と, 流動的な医学用語構成の特質が見えてくる。

本研究では, 辞典での語要素の認定・記載がどのような流れになっているのかも検討した。実際の例はドーランド25版から27版への増補改訂にみる事ができる。ドーランド27版(1992)は, Dorland. 25th ed. (1974) に対応する日本語版25版 (1980) に, 原著26th, 27th ed. で増加した用語 (16,000語) を増補する形で発行さ

れている。この増補分の用語を見ていくことによって原著の25版から27版までの10年間にどのような移動があったか知ることができる。

16,000語の増補改訂のうち語要素に関する移動は282件あった。そのうち新しく記載されたものの数は111 (接頭辞20, 連結形68, 接尾辞21, その他2)である。表3には新しく加えられた語要素のみを掲載している。ここで意外だったのは, 当然これまでに語要素として掲載されていると思っていたものが, 実は最近になって始めて辞典に載せられているということである。この例としては, appendic/o, bronch/o, cerebr/o, ren/o, tonsill/o, uter/o などの臓器・器官を表わす連結形や -lith, -stat, -trophy などの接尾辞をあげることができる。25版から27版への語要素の増加をみると, まず, 同じ語要素をもつ医学用語群が記載されると, そのあとで共通項である語要素が抽出されてくるという流れが見られる。語要素の設定においても, ドーランド, ステッドマンが編纂された初期の頃は別として, 今新しく語要素として付け加える場合には, 実際の使用状況が優先している現実が浮かび上が

表3 Dorland. 25th ed. から 27th ed. への増補に伴って新しく記載された語要素

語要素	分類		語要素	分類		語要素	分類		語要素	分類	
	日本語版	英語版		日本語版	英語版		日本語版	英語版		日本語版	英語版
ameb(i)(o)-	造	CF	cocco-	用語因子	WE	kysth(o)-	頭	CF	-phyte	造	CF
amel(o)-	造	CF	cono-	造	CF	-lith	尾	WT	-plasia	造	CF
appendic(o)-	造	CF	cortic(o)-	造	CF	loph(o)-	造	CF	-plasm	造	CF
apic(o)-	頭	P	cteno-	造	CF	mel(o)-	頭	CF	por(o)-	造	CF
asthen(o)-	造	CF	cryto-	造	CF	melit(o)-	造	CF	-profen	尾	S
ather(o)-	造	CF	da-	頭	P	mento-	造	CF	proro-	造	CF
atroph(o)-	造	CF	dendr-, dendro-	造	CF	mer-	造	CF	ren(o)-	造	CF
atlan(o)-	造	CF	-derm	尾	S	-mere	尾	WT	reticul(o)-	造	CF
audi(o)-	造	CF	dicty(o)-	頭	CF	mesi(o)-	頭	CF	-rrhaphy	尾	WT
auri-	造	CF	ectro-	造	CF	mini-	造	CF	sept(o)-	造	CF
ax(o)-	造	CF	-emia	尾	WT	muci-	頭	CF	sn-	頭	P
bacilli-, bacill(o)-	造	CF	exa-	造	CF	nev(o)-	造	CF	-some	尾	WT
-bacter	造	CF	-facient	尾	WT	nor-	頭	P	sphingo-	造	CF
bacteri(o)-	造	CF	flav(o)-	造	CF	nucle(o)-	造	CF	spir-, spiro-(コイル)	造	CF
brachi(o)-	頭	CF	-fuge	尾	WT	-opia	造	CF	spir-, spiro-(呼吸)	造	CF
bronch(o)-	造	CF	geni(o)-	造	CF	-opsia	造	CF	-stat	尾	WT
calc(o)-, calci-	頭	CF	glomerul(o)-	頭	CF	-ous	尾	S	stom(o)-	造	CF
calcane(o)-	頭	CF	hepa(o)-	造	CF	ox-	造	CF	synovi(o)-	接統語	CF
calori-	頭	CF	herpet(o)-	造	CF	oxo-	頭	P	taur(o)-	頭	CF
cement(o)-	頭	CF	hymen(o)-	造	CF	pauci-	造	CF	thall(o)-	造	CF
cerc-	造	CF	-iatry	尾	WT	peritone(o)-	造	CF	thel(o)-, thele-	造	CF
cerebr(o)-	造	CF	-ic	尾	S	peroxy-	頭	P	-thiazide	尾	S
choano-	造	CF	-idae	尾	WT	pet-	造	CF	tonsill(o)-	造	CF
cholangi(o)-	造	CF	il-	頭	P	phaeo-, pheo-	造	CF	trepo-	造	CF
-chrome	造	CF	ir-	頭	P	phalang(o)-	造	CF	-trophy	尾	WT
-cide	尾	WT	-ite	尾	S	pheno-, phen-	造	CF	tympan(o)-	造	CF
cine-	造	CF	juxta-	造	CF	-phil-, phile	尾	WT	uter(o)-	造	CF
-clast	尾	WT	kain(o)-	造	CF	-philic	造	WT			

造：造語形 頭：接頭語 尾：接尾語
 (ただし, 本文では造語形は連結形, 接頭語・接尾語はそれぞれ接頭辞・接尾辞としてある。)
 CF: combining form P: prefix S: suffix WT: word termination WE: word element

っている。

なお調査中に筆者らは一つの疑問点とも言うべきものを認めた。それは、原著 Dorland の語要素の記載と、それに該当する日本語版の語要素の記載とが違っている場合があることである。先に、接頭辞（接頭語）20、連結形（造語形）68と報告したが、これは、日本語版によった数である。原著を調べると接頭辞7、連結形81になる。この理由ははっきりしていて、原著 Dorland で combining form となっている語要素が、日本語版では接頭辞（接頭語）として出されているからである。combining form を接頭辞と訳した意図は不明である。新規掲載のものだけで13の combining form が接頭辞と訳されているが、282件全部で見るとその例は27になる。その中では b, d, g, k, m, t の項に combining form を接頭辞と訳す例が集中している。

ま と め

prefix, suffix について Stedman には、“Prefixes and suffixes are affixed (attached) to a word or stem, in contrast to the joining of two or more words or stems to form a compound word. Most of the prefixes and suffixes used in medical terminology have come almost unchanged from Greek and Latin prepositions, adverbs, and adjectives”¹⁴⁾と書かれてあり、付属的なものだという説明がなされている。また、接頭辞は意味を変え、接尾辞は機能を変えらることも述べられている。このような説明によって、各語要素の間にはかなり明確な境界線が引かれているように聞こえる。しかし、今回の調査では、実際には接頭辞と連結形、接尾辞と語あるいは連結形の区別はそれほどはっきりしたものではないことが明らかになった。

Dirckx は The Language of Medicine の中で接頭辞、接尾辞、連結形について綿密な定義を行ったあと、次のように affixes (接頭辞、接尾辞) の区別の限界について述べている。

“... affixes cannot always be clearly distinguished from base words. It is customary to define an affix as an indivisible meaningful unit (morpheme or formant) that cannot stand

alone. The distinction is valid for most Anglo-Saxon words, where the dependent status of affixes (mis-, un-, -dom, -ness) contrasts sharply with the independence of the elements that go to form compounds like breakdown, headache, and lockjaw. But in words built of Greek and Latin material there is no such difference...”¹⁵⁾

さらに、彼は、ギリシャ語、ラテン語にはその語尾変化の性質上、英語のような完全な独立をもたらす語要素はないとしている。つまり、語根も完全な独立性は持っていないため、「依存性」を affix の証明とするのならば、ギリシャ語、ラテン語から派生した医学用語の語要素はすべて affix ということになる、と説明している。このように医学用語は古典語からの歴史と特質を包含しているだけに、接頭辞、連結形、接尾辞の間の明確な区別はよけいに難しくなっているであろう。

連結形よりも一貫性を維持しているようにみえた接頭辞、接尾辞の分類は、調査の結果、かなり恣意的な要素があるらしいということがわかってきた。そこにはすべて実用の必要として生まれきた造語ルールの姿があるともいえよう。もちろん医学用語が、ギリシャ語、ラテン語から派生した過程では、必然的な言語法則が作用して現在の英語としての語形ができたのであろうが、現段階での医学用語の流れは、実用を通して動いていることは確かなように思える。語要素の設定と造語法はまさに、慣用という基準で行われているとっていいであろう。教育現場においては、この点を考慮に入れて造語法の基本を損なうことなく柔軟な指導をしていくことが必要と考えられ、そのためには多くの演習を通しての具体的な学習が望まれる。

文 献

- 1) 名木田恵理子他：医学用語の造語法についての考察(1)音の脱落現象、川崎医療短期大学紀要、14, 1994.
- 2) Cohen, Barbara J.: *Medical Terminology*. Philadelphia, Lippincott, 1989.
- 3) Gyls, Barbara A. & Wedding, Mary Ellen: *Medical Terminology*, 2nd ed. Philadelphia, F. A. Davis, 1988.

- 4) LaFleur, Myrna W. & Starr, Winifred K. : *Exploring Medical Language*, 2nd ed. St. Louis, Mosby, 1989.
- 5) Birmingham, Jacqueline J. : *Medical Terminology*, 2nd ed. St. Louis, Mosby, 1990.
- 6) *Dorland's Illustrated Medical Dictionary*, 28 ed. Philadelphia, Saunders, 1994.
- 7) *Stedman's Medical Dictionary*, 25th ed. Baltimore, Williams & Wilkins, 1990.
- 8) ドーランド医学大辞典編集委員会 : ドーランド・廣川図説医学大辞典 25版. 廣川書店, 1988.
- 9) ドーランド医学大辞典編集委員会 : ドーランド・廣川図説医学大辞典 増補27版. 廣川書店, 1992.
- 10) Birmingham, op. cit., 8-9.
- 11) Birmingham, op. cit., 13.
- 12) Gylys, op. cit., 36.
- 13) *Stedman's Medical Dictionary*, 25th ed., xxxv.
- 14) *Stedman's Medical Dictionary*, 25th ed., xxxvi.
- 15) Dirckx, John H. : *The Language of Medicine*, 2nd ed. N. Y., Praeger, 1983 : 97-98.

